

保育士養成における造形表現の素材についての授業実践の報告

東 景子*

Report on Class Practices on Materials in Creative Expression in Childcare Worker Training

Keiko Higashi

【キーワード】 保育士養成, 造形表現, 素材

Training of Childcare Workers, Creative Expression, Materials

はじめに

本学は保育士養成校で、一回生では表現技術（造形）、二回生では保育内容の指導法（造形表現）という科目があるが、保育士資格、幼稚園教諭資格を取得するのに必須科目である。

二年間という限りある時間の中で、著者は学生を保育士として送り出す際に、学生は多様な素材を一通り作る経験をしておく必要があると考える。学生自身が今まで学んだことの無い素材や表現・技術を、保育現場で子どもたちに支援するのは難しいと考える為である。学生が経験したことがないという理由で、子どもたちの素材に触れて創作する機会が狭まるのは懸念すべきことである。造形活動の意義は、遊びや五感を通して安定した心身を形成する大切な役割を果たしている。一人ひとりの学生の背景には、これから出会う子どもたちが沢山いるということを考慮し、多様な素材を積極的に授業に取り入れていきたい。そしてそれ以前に、学生自身が「造形表現は楽しい」と思うことが、子どもにとって大切な存在である保育者との関わりをより深め、安定した心身を形成し、生きる力の基礎となると考察する。なるべく絵を描くことに苦手意識を持つ学生も、授業に参加がしやすくなるように、また、子どもの感受性を共有できる保育者を養成する為に、多様な造形表現を経験出来る様な工夫を取り入れる様に心掛け、本学の授業実践内容を報告する。

1. 素材を活かした授業実践の報告

『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（平成29年告示）（文部科学省 2017）において、「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」、3内容の取り扱いについては、「表現意欲を十分に発揮させることが出来るような遊具や用具などを整え、自己表現を楽しめるよ

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

うに工夫すること」¹⁾²⁾³⁾とある。今回は、保育士養成校の学生に向けて、ビニール素材、粘土を使ったロール版画、針金を使ったモビール、本学の冒険遊び場「Cパーク」において、園児と小学生を対象とした竹クラフトコーナーについて紹介する。

1-1 ビニール素材を活かした衣装作り

先行事例としては、花篤、岡田（2009a）による模擬保育の例において、着るものをつくる題材として「楽しいファッションショー」が紹介されており、「カラーポリ袋を使って洋服づくりを楽しむ。洋服づくりをきっかけに、身につけるものへの展開を楽しむ」⁴⁾ことをねらいとしている。

著者は、一回生の表現技術（造形）という授業で、ビニール素材を用いて「子どもが着たいファッション作りー素材を活かすー」という教材を実践した。ビニール袋は色の種類も豊富で比較的安価であり、袋の底の一片と、両側二辺をハサミで切るだけで、誰もが衣装を制作することが出来るので、創作活動が苦手な学生も最低限のベースが出来ており、創作に参加しやすいと考察する。また、実際の幼稚園、保育園、こども園の現場でも、運動会や生活発表会の衣装としても取り入れられることが多いことと、子どもたちにとっても身近な素材である為取り入れた。

テーマ設定は、「子どもが着たい」というところから学生が発想し、様々なアイデアが出た。例えば、スーパーマリオブラザーズ、サンリオ、ディズニープリンセス、ミニーマウス、ドラえもん、アンパンマン、魔女の宅急便のキキ、プリキュア、マイクラのような、比較的既成のキャラクターの衣装を作る傾向が多かった。他にはシスター、鬼、着物、チャイナドレス、執事、アイドルなど、独創的なものもあった。子どもたちは45リットルビニール袋一枚でワンピースのようなものが作れるが、大人では上下2枚が必要である。特に下の衣装は、着脱のしやすさを考えて、腰の部分に紐を通す工夫をすると、次回も着用しやすい。また、男子学生においては、生地が足りず、一枚のビニール袋でズボンを制作するのが難しいため、上半身だけの制作に取り組むか、上下二枚ずつビニール袋が必要なことも考えられる。ビニール袋の制作における注意点は、ビニールの素材によっては力を加えるとさけてしまう恐れがあるので、なるべく丈夫で透けない素材を利用したい。特に力が強く加わる脇の部分等は、ビニールテープ等で補強し、お花紙等を装着する際には、のりではなく、両面テープなどが望ましい。制作においては、自然とグループになって協力して制作をする姿が見られた（写真1）。



写真1 スカートをプリーツにする学生



写真2 テントウムシの衣装で飛ぶ様子を表す学生

撮影方法は、自身が制作したキャラクターのイメージに合う場所とポーズを考えて撮影することを提案した。例えば、ミツバチやテントウムシの衣装を制作した学生は、飛ぶポーズや草花に近寄ったイメージで撮影し、衣装のイメージにあった場所とポーズで作品撮影をする姿が多く見られた（写真2、3）。この授業を考察すると、裁断の工夫とベースの生地に加える装飾を施すのが重要となってくる。ビニール袋2枚を上下に着用するのは全員同じ条件であるが、そこからどのように発展させて制作をすれば良いか迷う学生が複数いた。イメージが思い浮かばない学生については、お花紙などで装飾して独創性が出るように指導し、小物を持つことで、キャラクターのイメージに近づく場合は、帽子の製作方法や、小物の制作も指導する必要がある。亀の甲羅や、そのキャラクターが好きな持ち物がクッションである場合、衣装とは別のビニール袋を使用し、その中に新聞紙を入れてボリュームを出すなどの指導も行った。



写真3 衣装のイメージと合った場所で撮影する学生

1-2 ロール版画の授業実践の考察—学生と保育士への実践から—

東（2023）はロール版画を紹介^{6）}し、実際に本学の学生と、協力園であるK町立Nこども園（大阪）の保育士13名に実践した。ロール版画とは、現段階では、EVA（スポンジシート）を版として利用し、①鉛筆で引っ掻くようにして絵を描く手法と、②好きな形にEVAをハサミで切り、粘土伸ばし棒で粘土に写し取る版遊びの手法の2種類が出来ることを提案している。

ロール版画の版となる部分には、EVA（以下、スポンジシート）を利用し、3名～4名のグループで制作を行った。学生はテーマを各グループで決め、水族館、動物園、梅雨、クリスマス、花、キャラクター、似顔絵、街、アンパンマン等が挙げられた（写真4）。

全体的に、①鉛筆で引っ掻くようにして絵を描くよりも、②好きな形にスポンジシートをハサミで切って写す方法の方が学生にとっても取り組みやすい印象があった。鉛筆で引っ掻くようにして絵を描く手法については、「鉛筆は尖りすぎない方が良い」、「鉛筆は丸すぎない方が良い」、「筆圧の弱い子には少し注意してみる必要がある」など、さまざまな回答が出ており、鉛筆以外のペン類の検証が必要である。写し取った際に、鉛筆の跡が粘土に写し取られるため、割り箸ペンなどの色につかないもので代用することも検討できる。

また、子どもたちの想像できる姿としては、「絵が粘土に写って喜んでいる姿が予想できる」「スポンジシートに絵が描けることを楽しみそう」との回答が出た。

子どもたちへの支援・援助については、「どんな絵が描きたいか決まらない子には、その子の気持ちを引き出せるような声掛けをするのが必要」、「失敗した時のために余分の数のスポンジシートが必要」、「案が出ない子については資料が必要」と答える学生もいれば、「例などはあまり挙げず、好きな形に切らせてあげる」など、自らが実践した上で気づく意見が数多くあった。また、「写し取る粘土を柔らか

くしておくか、予め伸ばしておいてあげる」、「切ったスポンジシートを用意して、写し取りを楽しむ」、「粘土に写し取ると、スポンジシートを粘土から取り出しにくいので、セロハンテープなどを貼って、剥がしやすくする」など、具体的な支援が必要であると答える学生が多く居た。

作品のイメージが反転することに着目する学生もあり、「反転して、写した時の想像もしながら取り組めるから、勉強になる」、「文字を書くときに反転するので、鏡文字を伝える」という学生もいたことから、協力園での実践においては、改善してトレーシングペーパーの準備と、子どもが参考にしたいキャラクターや資料をなるべく幅広く用意した。

その後、K 町立 N こども園（大阪）の保育士 13 名にご協力頂き、ロール版画の指導を実施した。学生と同様、保育士でグループを組み、各自テーマを決めて制作した。完成したテーマは、誕生日会、花、水族館、『しろくまちゃん』（こぐま社）の 4 種類が挙げられた。

本学で実施した際に、「作品のイメージや文字が反転すること」について、改善させる必要があった為、容易にイメージを反転させるためにトレーシングペーパーを準備物に追加した。結果として、しろくまちゃんのパン屋のメニュー表のように、パンの名称を入れたり、誕生日会のケーキに文字を入れ、スポンジシートも作品の一部として撮影するグループが増えた（写真 5、6）。

「子どもたちにロール版画をする上で、どのような支援が必要か」と質問したところ、「スポンジシートに描く前に、トレーシングペーパー等、紙に描いてから取り組むことで自信を持って取り組めると思う」といった回答が複数あり、子どもに自信を持たせるためにも、イメージを写し取るトレーシングペーパーは必要と伺えた。また、「形を切って写し取ることを一度経験しておいて、面白さを感じてから、テーマを決めて描いたものを写し取り、段階を追って行う」「椅子に座って描く時間と、粘土伸ばし棒は力が必要なので、立って転写する時間に活動を分ける。慣れたら転写中に思いついたものを描いても良いことにする」のように、活動の段階を分けた方が良いと答えた人も複数いた。

予想できる子どもの姿や声かけについては、「自分の描いた絵が粘土に写ることに驚くと思う。何回でもやり直すことが出来ることを、子どもが好きな魔法のような言葉を使って惹き込む」といった回答も出た。

学生と保育士の回答を考察すると、鉛筆の検証と転写や自信を持って取り組むためにトレーシングペーパーの活用、スポンジシートを剥がしや



写真 4 水族館をテーマにしたロール版画作品



写真 5 絵と文字を組み合わせたロール版画作品

すくするためにセロハンテープなどの使用、子どもに実施する際には、段階を経て行き、声かけについても、子どもの思いを引き出すような言葉を選んで支援することが重要であることを明らかにした。

1-3 アルミ針金を利用したモビール作品の授業実践の考察— 学生と高校生への実践から—

学生が素材や道具に慣れておくことで、学生自身の表現の幅を広げ、自信を持って子どもたちと造形を通して関わる事が出来ると著者は考察するが、針金やペンチもその内の一つと言える。今回使用するペンチにおいては、針金などの金属を容易に切ることが出来ることから、著者は小学生の中学年相当からの使用が適していると考え、中本（1999a）の「道具の有用性と道具の正しい使い方、造形上の技法を積極的に指導する側面」⁷⁾に重点をおいて学生に指導した。

本学の一回生には授業の一環として、また、オープンキャンパスで来校した高校生を対象に、「針金でゆらゆらモビールを作ろう！」というテーマで針金制作を実施した。正しいペンチの扱い方を身につけ、子どもが喜ぶものを作る力を身に付けることや、もの作りの幅を広げることを目標とした。モビールとは「動く彫刻」とも称され、アメリカの彫刻家、アレクサンダー・カルダー（1898-1976）が創始者と言われている。国立国際美術館（大阪）の地下には、『ロンドン』（1962）という赤いモビール作品が天井から展示されている。このように芸術作品として展示されるようなものもあれば、乳児が天井を眺める際に見つめる知育玩具として、またインテリア装飾として、モビールは幅広く知られている。

アルミ針金で制作する下絵には、花、猫、ハート、車、星、雲、鳥など色々出たが、中には複雑なイメージを描く学生がいたので、アルミ針金で作りたい形のイメージを太ペンで一筆描きをし、どこから針金を折って作成すれば作りやすいか、スタートとゴールを決めて下絵に矢印を入れるようにし、それを見ながら制作するよう指導した。

アルミ針金は、手でも曲げたり、折ったりすることが可能であるが、的確に折り曲げたい場合は、ペンチの先で折りたい箇所を摘んで折ることや、何度も折り曲げていると針金が弱って折れることから、あまり何度も同じ箇所に力が加わらないように指導した。最後に針金を切る際には、ペンチの先を開いた状態にすると、ペンチの根本が針金を切れやすいように施されているため、そこで裁断出来ることを伝えた。これらの指導をはじめに行うことで、ほとんどの学生が各自でペンチを使う感覚を理解しながら制作することが出来た。針金で制作した一つの作品とバランスを取るために、学生には1-2で取り上げた、写し取りを楽しんだEVA（スポンジシート）を反対側に取り付け、支柱は針金や竹ひご、木の枝などを選べるようにし、金や銀の入った綺麗なひもで結んで完成した。

また、高校生対象のオープンキャンパスでは、針金の作品とバランスが取れるように、円に切った色

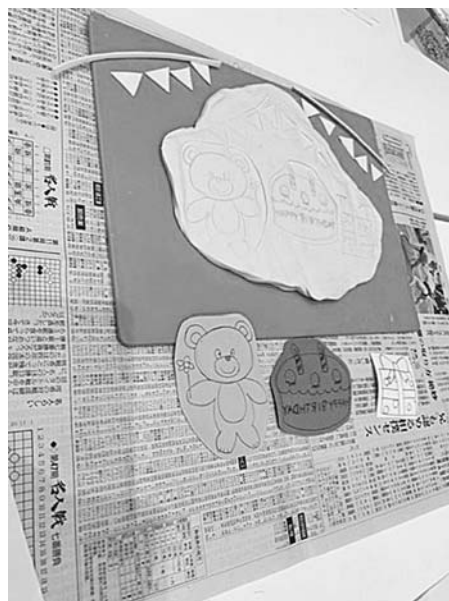


写真6 スポンジシートも含めて作品にしたグループ

画用紙4枚から8枚貼り合わせてペーパークラフトが制作出来ることを示した(写真7)。このペーパークラフトは、左右対称の形を何枚も貼り合わせれば、立体的な作品が制作出来ることから、今回のような円に捉われる必要はない。時間がある場合は、左右対称の形を学生自身が自由に考えると、より広がりのある作品が生まれると考察する。



写真7 針金と色画用紙でバランスをとったモバイル作品

このモバイル作品で利用した素材は、アルミ針金とスポンジシート(もしくは色画用紙)とひもの3種類である。近年では「〇〇セット」

のように、袋の中のものを利用すれば作品が作れるといったものが多く販売されているが、著者はそれらを使うのではなく、身近な素材を自ら選んで工夫して作る力を学生に身につけさせたいため、身近な素材だけでモバイルが作れることを学生にも認識させた。今後もモバイルに適した素材を探求し、学生が様々な素材を選んだ際に的確な指導を実施したい。

2. 冒険遊び場「Cパーク」のクラフトコーナーの実施

2-1 世界と日本の冒険遊び場の歴史

世界で最初の冒険遊び場は、1943年に第二次世界大戦のコペンハーゲン市郊外につくられた「エンドラップ廃材遊び場」と言われている。大戦直後、1945年にエンドラップを訪れたイギリスの造園家A卿夫人は深く感銘を受けてその思想を持ち帰り、ロンドンの爆撃跡地に冒険遊び場をつくり、世論を喚起して、冒険遊び場運動を隆盛させた。イギリスで力強い大きな流れとなった冒険遊び場づくりは、発祥の地、デンマークに逆輸入され、やがて1950~70年代を中心に、ヨーロッパ諸国に広がった。1979年に東京都世田谷区で生まれた「Hプレーパーク」が、日本では最初の冒険遊び場であると言われている。⁹⁾

2-2 2本学における冒険遊び場について

本学では大阪の河内長野市に位置し、学内の恵まれた自然を有効活用するため、河内長野市の幼稚園、保育園、こども園の園児を対象に冒険遊び場を開園するため、NPO法人Kid'sぼけっとの副理事長K講師のご指導の下、昨年準備を進めている。プレオープンイベントが2023年9月2日(日)に開催されたが、著者はそこで竹クラフトコーナーと看板のデザインを担当した(写真8)。他には、大工さん、らくがき、火遊び、水遊び、泥遊び、家づくり、昔遊び、土手滑りコーナー、休憩所にはかき氷などを教職員、ボランティアスタッフ一同が準備をし、園児や小学生を迎えた。

中本(1999a)は、「子どもはもともと道具を使うことを好むものだといわれるが、今日の日常環境の中で、そうした基本的な感覚が薄れた子どもも見受けられる。」⁷⁾と述べている。今日において、複数

の子どもたちが影響を受け合って、道具を自由に扱える環境は少ないといえる。子どもが道具を使用する際には、幼児用に作られたのこぎりやカナヅチ、軍手を準備し、時間に追われずに落ち着いて制作が出来る雰囲気を作るなど、安全を配慮しながら支援する必要がある。

また中本（1999b）は、「危険性を持っている刃物を実際に使って、緊張感を持ったのびきならない場面での経験は、危険を避けて安全を保つ知恵とセンスと身につける大切な体験学習の場である」⁸⁾と述べている。今回の冒険遊



写真8 冒険遊び場「Cパーク」の外観

び場のプレオープンのクラフトコーナーと大工コーナーでは、参加した複数の子どもたち（園児から小学校中学年）は、複数のスタッフのいる中で道具を触れることが出来たため、完成を急がずに安心して道具を使用し、ものづくりをする機会が作れたのではないかと考察する。

併設された大工コーナーでは、小さな角材やベニヤ板などの切れ端などを無造作に用意し、子どもたちが何かに見立てながら、夢中で作る様子が伺えた。釘打ちが初めての子どもには、釘打ち体験から始め、慣れてきたら木と木を釘で打ちつけ、ロボットや剣、ドールハウスを制作する子どもの姿も見られた。⁹⁾

著者が準備していた竹クラフトは、竹ぽっくり、竹けん玉、竹とんぼの3種類を準備していたが、竹の加工は竹割り、レシプロソー（電気のかぎり）での裁断、ドリルでの穴開けといった工程があり、大人が事前に準備する箇所が多く、子どもの手を加えられる猶予が少なかったところは反省点である。今回は比較的年齢の小さい子ども（1歳から4歳程度）が集まり、竹のおもちゃに色マジックペンで絵を描き加えることで、自分の作品を完成させた。

花篤、岡田（2009b）は、伝承おもちゃづくりは数多くの価値を子どもに与えてきたと述べている。「『人的関係』『精神集中による遂行力』『失敗による材料の特性把握』『基礎的な科学する心』『仕組みにかかわる科学的原理』『成就感』『材料を活かした喜び』『自立心』など、子どもの生活の中で人間としての基盤を培う要素に満ちている。」⁵⁾と述べている。今回竹を加工することで、様々なおもちゃが出来ることを紹介出来たが、次回は子どもが材料を選んで加工する喜びを味わえるように改善したい。

おわりに

今回の教育実践において、絵を描くことに苦手意識のある学生にも楽しいと感じることのできる授業を展開するために、ビニール素材、粘土を使ったロール版画、針金を使ったモビール制作を実施し、竹を使用した伝承おもちゃを園児や小学生に紹介した。

1-1でご紹介したビニール素材を活かした衣装作りにおいては、4月にこの授業を実施したが、表現したいキャラクターに変身し、友人と写真撮影をする機会を持つことで、入学直後の緊張した雰囲気

が少し解れたような印象を持った。今後は、ハロウィン行事の時期に衣装作りを実施した場合との比較を検討したい。

学生からは、「(著者の) 授業を受けて前よりも造形に興味ができたのでこれからもっと深く造形について学びたい」といった感想が複数得られた。今後も様々な素材を考察しながら、学生自身の素材と道具の活用向上を目指し、保育現場の子どもたちの実態と合った内容が実施できるように授業を模索していきたい。

謝辞

1-2でご紹介したロール版画にK町立Nこども園(大阪)の園長先生、副園長先生、保育士13名の皆様に事前からご準備とご協力を頂きました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

また、2-2でご紹介したCパークのクラフトコーナーを実施するにあたって、NPO法人Kid'sぼけっとの副理事長 川口裕之講師をはじめ、冒険遊び場「ちょっとバン」スタッフの矢部梢氏、本学の石井雅彦学長、島田和秀副学長、赤土壽典事務局長、大浦知加講師、職員の馬淵祐三子氏、後援会会長の阿波加健一氏、後援会の橋本悟司氏、ボランティアスタッフの南方拓也氏、阿波加祥大氏、当日には数名の学生スタッフには、多大なるご準備とご協力を頂きました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

<引用文献>

- 1) 文部科学省(2017)『保育所保育指針』(平成29年告示)第2章表現 pp.29-30
- 2) 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』(平成29年告示)第2章表現 p.21
- 3) 文部科学省(2017)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』平成29年告示)第2章表現 pp.31-32
- 4) 花篤實・岡田愨吾 編著(2009a)『新造形表現 実践編』三晃書房 p.135
- 5) 花篤實・岡田愨吾 編著(2009b)『新造形表現 実践編』三晃書房 p.165
- 6) 東景子(2023)『子どもの造形表現における版画表現の可能性』未来教育研究所紀要第11集 pp.37-38
- 7) 中本岩雄(1999a)「道具を使う」(監修 花篤實、編集 永守基樹・清原知二)建帛社 p.87
- 8) 中本岩雄(1999b)「刃物を使う」(監修 花篤實、編集 永守基樹・清原知二)建帛社 p.88
- 9) 特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会ホームページ

<https://bouken-asobiba.org/known/worldhistory.html> (閲覧2023年10月22日)

註) 本学のCパークは、2023年9月5日(火)朝日新聞朝刊21ページに掲載された。